


戸田の穂ノ木図

河野 茂

戸田の山田家には、江戸時代の田畑穂ノ木図三十枚が保存されている。その図は、西は富海との境界から始まり、椿峠、戸田山、橋本、市西、十軒屋などの地域が含まれ、田畑毎の反別、収獲高と、所有者の名が記されている。尚所有者名が、清左衛門としるされた箇所が多い。山田家の三代は清左衛門であるが、同人が図の清左衛門とすれば、この図の製作は、江戸中期と推定できる。それは山田清左衛門の生年が元禄六年（一六九三）で歿年は宝暦八年（一七五八）享年六十五才であるからである。この種絵図は、所有田地を確認し、貢租の正確を期するため、検地の際などに藩命により二部製作され、一部は藩へ一部は村役人の手許に置く。清左衛門歿後間もなく、宝暦検地（一七六一年に始まり一七六三年に終了）があったが、之との関係の有無は、確かでない。そしてこの

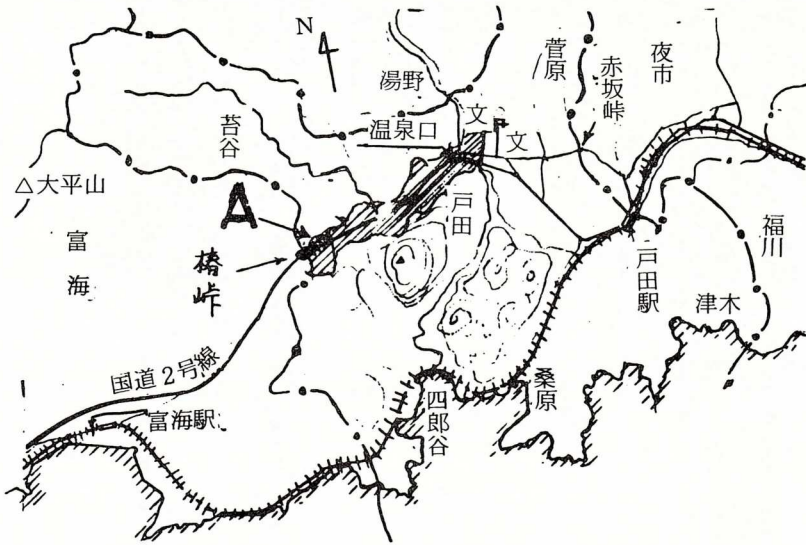
種の穂ノ木図は明治以降に、分間図と変るのである。

前記の三十枚の穂ノ木図のうち、上椿峠付近図の一枚を第3図に掲げる。第3図は三十枚の穂ノ木図群の西端のもので、よく注意してみると、図の左隅に都濃郡・佐波郡の境界を示す標石（) が描かれている。

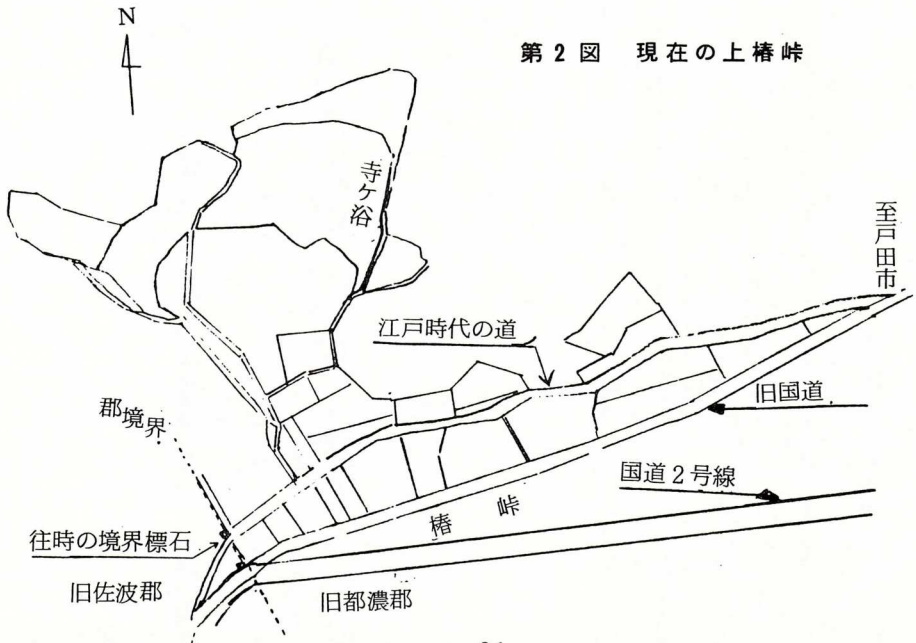
三十枚の穂ノ木図群をつなぎ合わせると、第1図中の斜線部分として示される。その斜線部の内のA部について、分間図に基く地形図を第2図に示す。第2図の右端から左端（往時の境界標石）に至る間が、第3図に記入されている「東」から「境界標石」に至る間に相当するものである。

こうした江戸時代の測量の結果をフリーハンドで描かれた穂ノ木図と、現代の測量技術の成果の分間図を比較してみると、両者の地形は驚く程一致している。江戸時代の測量技術にも優れたものがあつたことを改めて知るおもしろい。

第1図 戸田略図



第2図 現在の椿峠



第3図 穂ノ木図

中央に東西に走る太い線が、江戸時代の道。

原寸：35 × 30 cm

